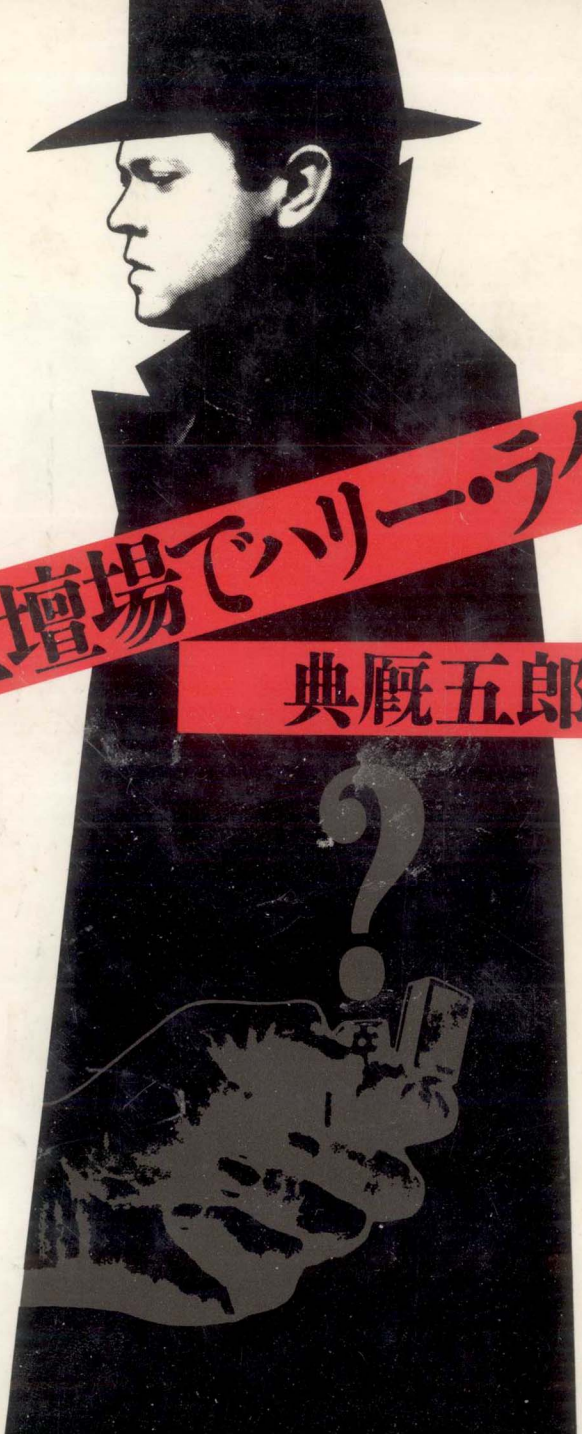
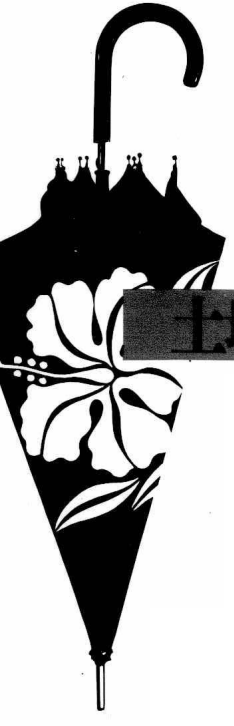
土壇場でハリー・ライム

典厩五郎





土壇場でハリー・ライム

典厩五郎

文藝春秋

©Gorō Tenkyū 1987
Printed in Japan

土壇場でハリー・ライム

一九八七年八月十五日第一刷
一九八七年十月一日第四刷

定価 一二〇〇円

著者 典厩五郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

ISBN 4-16-309850-X

〈目　次〉

第一章　十番街の殺人　7
第二章　ライオンは寝ている　38
第三章　急がばまわれ　74
第四章　花はどこへいった　95
第五章　悲しき雨音　119
第六章　電話にご用心　143
第七章　朝日のあたる家　164
第八章　勝利をわれらに　180
第九章　パサディナのおばあちゃん　199
第十章　愛なき世界　219
第十一章　孤独な太陽　239
第十二章　青い影　271
第五回サントリーミステリー大賞選評　301

装幀——玉井ヒロテル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

土壇場でハリー・ライム

目撃者の証言（その一）

「驚くのがあたりまえだろ、いきなり空から人が降ってきやがったんだから。傘？　ああ、そういえばこうもり傘かなんか握りしめてたな。え、こうもりじゃなくてパラソルだって？　そんなことわかるわけないだろ、目の前の舗道に人が落っこちてきたんだぜ。戦時中、すぐ足元に焼夷弾がズボッて落ちたことあるけどさ。あれ以来だよ、こんなに胆つぶしたのは。靴を右左とりちがえてはいてたのに気づいたかだと？　そんなことわかるわけないっていってるだろ。うん、それまで飲んでたのは恵比寿の料理屋だよ。建て前の祝い酒を一杯やって帰るとこでね。酔いなんていっぺんに吹っ飛んじまったよ、まったく。え、それを読むのかい？　面倒くさいな。規則？　わかったよ。ああ、この通りだ、まちがいない。これでいいけどさお巡りさん。わたしの職業、建築業って書き直しといてくれませんか。大工だと安っぽいって、ウチのガキがうるさくてね」

目撃者の証言（その二）

「ええ、うちは戦前からあそこでタバコ屋をやってます。主人は南方で戦死しましてね、子供を

三人も抱えて一時はどうしようかと思いましたよ。はいはい、ゆうべの話でしたね。とにかくゆうべは、雨のうえにすごい霧だったでしょ。それでお客さんもないと思いましてね、シャッターを降ろしながら、ひょいと向かいの丸金ビルに目がいったんです。パッと屋上から飛び降りるとこ見ちゃったんですよ。真っ赤な日傘さしてね。落下傘のつもりだったのかしらねあれ。日傘さしてたからわかったんですよ。でなかったら暗かったし、わかりゃしませんでしたねきっと。ええ、はじめ三階の屋根に落っこちたんですよ。あのビル、三階から上が急に細くなってるでしょ。そのあと、バウンドして下の路上に落ちたんですよ。はい、これをあたしがいった通りかどうか読んだうえでハンコを押すんですか。あらいやだ、ハンコなんか持ってこなかったわ。え？　拇印でかまわないんですか。はいはいわかりました」

第一章　十番街の殺人

1

真木光雄は、書きかけの原稿から顔を上げ、離れた月田文化部長の席を見た。

きれいに片づけられた机上には、だれが置いたのか、白い水仙の花をさした花瓶が置かれていた。

月田部長が死んでから一週間になるが、いまだに部長は死んだのだという実感がまるで迫ってこない。部長が自殺などするはずがないという思いが、真木の頭にこびりついて離れないせいかもしれない。

不可解だった。

靴を左右逆にはいたうえ、派手なパラソルをさし、夜霧の屋上から飛び降りるとはいったいどういうことだろう。自殺にしても他殺にしても、まず不自然さがさきにきてしまう。

月田は今月かぎりで東都新聞社を辞め、田舎へ帰ることになっていた。第二の人生は、故郷の和歌山で文房具店のあるじになることだった。店もすでに完成していると聞いていた。

月田は、若い頃から純文学の小説家を志望していたようだ。その意味では都落ちして故郷へ帰

るわけで、一時は、淋しそうな顔を隠そうとはしなかった。
だが、いったん帰るときめてからは、以前の月田からは想像もできないほどほがらかで明るくなった。迷いがふっ切れたのか、顔つきそのものまで変わり、もう一度新しく人生をやり直すのだという生命力がみなぎっているように見えた。
月田のいちばん身近にいて、そういう事情を知っている真木は、月田が死んだ翌日、六本木警察署へ呼ばれて行ったとき、そのことをはっきりといってある。
一昨日、警察は正式に月田の死を、「心身の消耗と衰弱による自殺」と断定した。
納得できない真木は、きのう六本木署を訪れた。
担当の、沢井というまだ学生服が似合いそうな若い警部補が、部下の部長刑事といっしょに会ってくれた。沢井には六本木署へ呼ばれたときすでに会っていたが、石清水と名乗ったおそろしく不景気な顔をした小柄な部長刑事とははじめてだった。
真木は再度、沢井に訴えた。だが沢井は、真木が話した事情をすべてといってよいほど逆にとった。夢破れて淋しく故郷へ舞いもどる四十なかばの男が、無力感と絶望から死神にとりつかれたとみたのである。
東都新聞社が、朝日や太陽のように一流新聞社であったなら、警察の見方もちがっていたかもしれない。東都がしがない三流新聞社であることが、沢井に先入観をあたえてしまっているのではないかと、真木は遠慮しながらもいってみた。
「そんなことはありません」
沢井はぴしゃりとはねつけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「遺書こそないけど、月田さんが自殺しても不思議はないという証言がいくらでもあるのですからね」

沢井警部補は冷たく云い切ると、途中で部屋を出ていってしまった。それきりもどってこなかった。

あとに残った石清水部長刑事の方は、最後まで根気よく真木の話を聞いてくれた。

しかしその石清水も、

「話はよくわかった。だがなにぶんあんた自身の個人的感情論ばかりでは、自殺をくつがえすにはほど遠いよ。なにしろ月田氏の周辺には、冴えない中年男が自殺する動機が売るほどあったようだからな」

自身、冴えない中年男の代表のような石清水が、うんざりした顔で真木にそういった。

「真木君、それにしても惜しかったな。アサデンコウ」

向かいの席の山添直二（やまぞえなおじ）が、また同じことをいった。

春のさつき賞で、一番人気のアサデンコウがリュウズキの七着と惨敗したときから、ダービーはアサデンコウから入ろうときめていた。

月田部長が死んだのは先週の金曜日である。二日後の日曜日、昭和四十二年五月十四日が、第三十四回日本ダービーだった。だが、真木たち東都新聞社の人間にとっては、月田文化部長の葬儀の日となってしまったのだ。

それでも、渋谷区初台にある月田部長の自宅でおこなわれた葬儀の途中、写真部のケンちゃんが、バチあたりの記者連中の依頼で、新宿の場外馬券売場までひそかに中座したのは知っていた。

さすがに、文化部の人間で馬券を頼んだのはいなかったようだが。
「たまにピタリ的中すれば、こんなもんですよ」
アサデンコウの単勝千円はよくついた。あらためて人気の恐さを知った思いだ。この伝でいくと秋の菊花賞は、一番人気でダービーを敗けたリュウズキから入る手かもしれない。
真木はとりとめもない考えをふっ切ると、ハイライトにジッポーで火をつけた。
東都新聞社のあるこの七階建ての丸金ビルは、雑居ビルである。
新橋で手びろく商いをしている丸金という八百屋が、戦前に建てたものだそうで、どこもかしこも相当なくたびれぶりだった。三階から上は、いくつもの小さな会社がひしめきあっているが、一階と二階、それに地下室は、東都だけが借りている。もっとも、借りているといえば体裁がいいが、実態は占拠しているのと同じことだそうだ。
終戦後、まだだれも借り手がなかった一時期、一階のごく一部を借りただけだった、現東都新聞社社長の千本松徳三郎が、じわじわと勝手に陣地をひろげてしまったのだという。
丸金の二代目はこのビルを取り壊したがっているのだが、千本松徳三郎が目の玉の飛び出るような立ち退き料を要求しているので、丸金ビルは朽ち果てるまでこの地に立っているしかないだろうというのがもっぱらの評判だ。
一階玄関の大きなガラスドアを開けると、左手に、東都新聞社の受付けカウンターがある。受付けのうしろは衝立てで仕切られた応接室。その奥が二百坪ばかりのだだっ広い部屋で、これが編集局。玄関右手は小さなロビーになっていて、エレベーターが二基。エレベーターの裏側が洗面所。さらにその奥には管理人室がある。二階は、社長をはじめとするおえらいさんたちの各部

屋と資料室。地下室は、写真部と発送部といった具合いだ。

東都新聞は夕刊専門紙である。

もちろん、大新聞のように附属の印刷工場などは持っていない。京橋の超高速度印刷所の工場を、毎日、朝八時から十時までの二時間だけ借りている。したがって、大新聞のように五版、十版と版を重ねてゆく新聞作りではなく、雑誌作りのように一回こっきりである。

東都新聞の整理部は、麻布の本社ではなく、京橋の印刷工場内に置かれている。

その印刷所は、新聞社の印刷工場のように徹夜で輪転機をまわしているわけではないから、整理部では、新聞の紙面作りである大組みを前夜の八時までにやっておく。

当日早朝、大ニュースなどのために時たま記事を入れかえることはあるが、ほとんどは前夜、整理部によって組まれた大組のまま印刷される。

だから工場側はともかく、本社側としては、新聞記者につきものの時間との闘いがほとんどない。真木たち本社側の記者は、午後三時までに部長か次長に記事を渡せばそれでよい。部長や次長は、それらの記事を退社時間の六時までに工場への連絡員に渡す。

朝、十時までに刷り上がった新聞は、トラックでいったん本社の発送部に持ち帰り、駅や街頭のスタンドで売るために仕分けして運び出される。

そして、大新聞の朝刊が出まわり、夕刊にはまだ間がある午前十一時頃の間隙を狙い、駅や街頭のスタンドでいっせいに売り出されるのである。いうまでもないが、東都新聞など夕刊紙には宅配はない。

仕事はさっぱりはかどらない。真木は二本目のハイライトに火をつけ、机上にある、すでに何

度も目を通した五月十三日付の太陽新聞朝刊を開いた。

ビルの屋上から飛降り自殺

十二日午後九時ごろ東京都港区麻布十番丸金ビル屋上から、女物のパラソルをさした男が約二十メートル下の路上に飛降りて即死した。六本木警察署の調べによると男は東京都渋谷区初台三ノ二〇東都新聞社文化部長月田春之さん（四五）で、勤め先のビル屋上から飛降り自殺したものと同署ではみている。

社会面片隅のベタ記事。

太陽以外の新聞も、社会面と地方版のちがいはあったが、いずれも小さな扱いながら掲載していた。しなかったのは、かんじんの東都新聞だけだった。

「バカをいうもんじゃない。不祥事をひき起こした社員を、大事な紙面をさいて読者に知らせる必要がどこにある！」

千本松社長の一喝でそうきまった。

十三日の東都新聞社会面には、月田部長本人の死については見あたらなかったが、おそらく月田が最後に書いたものと思われる記事が掲載されていた。

女優、轟夕起子の死亡記事である。

写真つきで、死亡記事としては比較的大きな扱いだ。まだ四十九歳の若さで病死した轟夕起子の経歴が、華やかだった宝塚時代を中心にまとめられていた。

オールド・ファンによれば、映画女優としての轟夕起子は、昭和十二年のデビュー作「宮本武蔵」でのお通役に止めをさすというが、真木は、まだ生まれる以前の作品で見ていない。

真木の記憶では、黒沢明の第一作「姿三四郎」で、姿の宿敵、村井半助の娘を演じた轟夕起子がもっとも印象的だった。当時、轟は監督のマキノ雅弘と結婚していてすでに一児の母だったが、とてもそうは見えない瑞々しい娘ぶりだった。

映画と芸能は月田と真木の担当だから、真木がおぼえのない芸能関係の記事は、すべて月田が書いたものとみてよい。

ただし、社会面に掲載される著名人の死亡記事だけは例外である。

毎日の新聞紙面が、本社から送った記事だけで、寸分の狂いもなくピタリとおさまってしまうことなどめったにあるわけではない。記事が多いときは、工場の整理部の判断で没にすればよいからなにも問題はない。だが大組みを組んでいき、記事がたりないとわかった場合、あまったスペースを埋めるため、整理部では大急ぎで本社に記事を要求してくる。

そのあまったスペースを埋める記事として、東都新聞では、著名人の死亡記事を電話で送ることが習慣化しているのである。

そのこと事態にも問題はない。東都新聞がユニークなのはここからさきで、その死亡記事は、すべて大新聞に載った死亡記事をほとんどそのまま送ったものなのである。大量に記事がたりなかった場合など、各大新聞からかき集めた死亡記事がずらりと居並び、一大奇観を呈することにあいなる。

この死亡記事送りは、工場からの電話に出た記者が、部署に関係なくやることになっている。

真木が入社間もないころ、工場の整理部から「たりないから、例のやつ送ってくれ」と電話が入ったことがあった。あいにく周囲にはだれもいなくてまごついていると、「太陽や朝日の社会面を開いて、死亡記事を読み上げろ！」と怒鳴られた。

そういうわけで、轟夕起子の死亡記事も、だれか手のあいている記者が送ったという可能性はあったが、真木が聞いてまわったかぎりでは、だれも送っていなかった。轟夕起子の記事が、月田の最後の仕事だったと結論づけてまずまちがいはないだろう。

2

午後二時。本社裏の喫茶店「バンビ」。

古めかしいロココ調のインテリアが、かえって新しく見えると若者たちの間ですっかり人気を呼び、近頃はいつきても混雑している。

ジュークボックスの曲が、コニー・フランシスの「カラーに口紅」からビーチ・ボーイズの「グッド・バイブレーション」にかわった。

今日中に書きあげてしまわねばならぬ映画評があったが、場所をこの店に移しても相変わらず身が入らない。思いは、すぐに月田部長の変死にいってしまう。

「いたいた」

明るい声とともに、向かいの席に藤崎明日香がふわりと坐った。

藤崎明日香は、家庭欄を担当する文化部の同僚である。オカッパ頭に白粉っ気のない顔。顔立ちは悪くないのだから、これで少しは化粧でもしたらと思うのだが、社内の明日香ファンにいわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com